

第 232 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

『人間のなかに おいてのみ 人間であり得る』 ～ 一筋の光 ～

筆者は、2024 年 1 月 26 日『病理組織診断』の業務を終えて、2004 年にスタートした南原繁研究会の 3 代目の代表を仰せつかっている『第 233 回南原繁研究会』（18:30～21:00：対面方式及び Zoom 方式の両方式併用：学士会館 310 号室）に Zoom 参加した。

今年(2024 年)11 月 4 日学士会館で開催される『南原繁シンポジウム』の講師、パネリストの選考について話し合った。また、【8 月の『夏季研究集会』 & 10 月の『東京大学ホームカミングデー』でのイベント】についても決議された。

今回の読書会のテーマは、南原繁著作集第二巻『フィヒテの政治哲学』であった。若き日に読んだ、南原繁(1889-1974)の『フィヒテの政治哲学』の『人間は ただ人間のなかににおいてのみ 人間であり得る。』の言葉が、今回鮮明に思い出されました。本当に、日々勉強である。

昨年(2023年)11月3日（文化の日、学士会館に於いて）の『第20回南原繁シンポジウム：南原繁における政治と宗教 ～ 南原繁再考(その1) ～』の記録本の発行の内容も討議された。毎年、『シンポジウムの記録本』が発行されている。2021年11月3日（文化の日、学士会館に於いて）のシンポジウムのタイトルは『南原繁における学問と政治』（添付）であり、2022年11月3日（学士会館に於いて）のシンポジウムは『日本の近現代史における南原繁』（添付）あった。筆者は、南原繁研究会代表として『まえがき ～ 一筋の光 ～』を執筆したものである。

今年（2024 年）は、『南原繁研究会創立 20 周年 & 南原繁没後 50 周年』でもある。南原繁は、内村鑑三(1861-1930)と新渡戸稲造(1862-1933)から大きな影響を受けた。東大卒業後の南原繁は、内務官僚から学者に転進し、ヨーロッパ留学を経て東大教授となり政治学史を担当する。戦後 東大総長に就任し、国家の再建を呼びかけ、『政治哲学』を深め、戦後改革の理想を掲げ、ことに『教育改革』に主導的役割を果たして行く。筆者は、若き日に、全巻『南原繁著作集 1～10 巻』を購入し熟読したものである。

